
バカとハルヒと宣戦布告

メール・シュトルーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとハルヒと宣戦布告

【Nコード】

N91340

【作者名】

メール・シュトローム

【あらすじ】

いつものように不思議な事に出すSOS団が目をつけたのは

...

第1話 始まり

キヨン

「ハアー」

ハルヒ

「どうしたのよキヨン」

キヨン

「何故俺達は不慣れなテストを受けなきゃいけないんだ」

ハルヒ

「ハアー、だからキヨンはいつまで経ってもダメキヨンなのよ」

キヨン

「俺がダメなのはわかってるから理由を教えてください」

ハルヒ

「キヨンと話してたらきりがないわ。…まあいいわ、テストを受ける理由は…面白そうだからよ!」

やっぱりそうか、まあ今に始まったことじゃないしな、そこら辺は目をつむるとするか。

そうしている間に次のテストが配られてくる。

今はとりあえず目の前にあるテストを片付けていくか。

この後はカリカリという擬音語だけが耳に聞こえた。

第2話 確定

事の始まりは文芸部室の中で言ったハルヒの一言で始まった。

ハルヒ

「皆、明日の朝9時に駅前に集合よ」

いきなり過ぎるなオイ！

キヨン

「ハルヒ、理由は何だ？」

ハルヒ

「不思議探索よ、今回は県外で探すわ」

キヨン

「いつもは灯台もと暗しとか言って近所だったじゃないか。何でいきなり遠出するんだ？」

ハルヒ

「キヨン、あたしはね…ありきたりなのはイヤなのよ！」

キヨン

「古泉、教えてくれ」

とりあえず隣りにいる古泉に話しかけた。

古泉

「なに、言葉道理の意味ですよ。彼女はとりあえず遠出をしたいの

ですよ」

そうとわかれば話しは早い、明日に備えて早く家に帰るだけだ。

キヨン

「ハルヒ、そうするとおごりの分はどつするんだ？」

ハルヒ

「それは電車賃をキヨンが払うのよ。はい、話しは終わり、明日に備えてグッスリ寝なさい」

ふむ、必然が確定になっただけか。

さて家に帰るとするか。

第3話 到着

翌朝。

俺のおごりのもと電車に乗って出かけていった。

駅を乗り継いだりして2時間程たった頃、ようやく下車した。

帰りもこれだけ使うのかと思っていたら……

ハルヒ

「ほら早くしなさい。モタモタしてたらバスが発しちゃうでしょ」

キヨン

「待てハルヒ、バスに乗ると帰りの電車賃が足りなくなる」

キヨン

「何してるのよキヨン。そんなにいつも浪費しているから肝心な時に足りなくなるのよ」

その浪費の元は月に三度も集合をかけるお前へのおごりだよ！

ハルヒ

「仕方ないわね、バス代は古泉君、あなたが払ってちょうだい」

古泉

「……………わかりました」

自分が払うという選択肢はないらしい。

バスで30分程揺られて降りたバス停の近くに、北高の比ではないとても大きな学校があった。

校門には学校名がかなり大きくこつ記されていた。

「文月学園」

第4話 乗り込み

キヨン

「ハルヒ」

ハルヒ

「何、キヨン？」

キヨン

「最初からココが目的か？」

ハルヒ

「そうよ、ココをSOS団第5支部にするわ」

第5か…5？

キヨン

「ハルヒ、3と4がわからないがドコだ？」

ハルヒ

「3は喫茶店、4はあんたの家よ」

キヨン

「そうか、ココの教師と生徒はどうするんだ？」

ハルヒへのツツコミは理由がなんとなくわかるからほつっておく。

ハルヒ

「支部長と支部員にするわ」

キヨン

「明らかにお前より立場が上の奴は？」

ハルヒ

「私がさらに上にいけばいいのよ」

キヨン

「人権はどうするんだ」

ハルヒ

「そういえばそうね、有希何かいい案ある？」

人任せか、それにそういえばって…まあ長門なら第5支部を作らな
いいい案でも……。

有希

「…試召戦争」

おお！その手があったか、ハルヒも戦争で負ければ文句は言えまい。

みくる

「せ、戦争ですか」

悪いが今は朝比奈さんの期待には添えない。

ハルヒ

「…そうね、じゃあ早速校長室に乗りこむわよ！」

ハルヒも全力で無視した。

そしていよいよ校舎の中に踏み込んだ。

一応念のため言っておくがスリッパに履き替えたからな。

第5話 交渉

校舎に入って5分くらいたった頃ようやく校長室の前に着いた。

さすがは土曜日ここまで1人も出会わなかった

《コンコン》

ハルヒがドアを叩く。

学園長

「入りな」

ドアの向こうから声がするどつちやらちゃんというよつだ。

ハルヒ

「失礼します《ガチャ》」

ハルヒも真面目モードだ。

学園長

「おや、見ない顔だね。誰だいアンタ達は？」

ハルヒ

「SOS団団長涼宮ハルヒ。我々は文月学園に試召戦争を仕掛けます」

いきなり本題かまあそれがハルヒだな。

学園長

「いったい何を賭けるんだい？」

ハルヒ

「我々が勝つたらここSOS団第5支部にします。負けたらそこにいる団員その1のキョンに1年間雑用係りをさせます」

…はい？

学園長

「残念ながら間に合ってるよ」

いるんだ…

ハルヒ

「ではアナタが決めて下さい」

学園長

「そうさねえ…アンタ達の中に機械いじりの得意な子はいるかい？」

ハルヒ

「有希がいます」

学園長

「その子に1年間開発の手伝いをしてもらうってのはどうだい？」

ハルヒ

「いい、有希？」

コクリ

ハルヒ

「わかりました。その条件で……あと戦争のルールをある程度こちらで決めさせてはくれませんか？」

学園長

「……いいだろう好きにしま……」

……ハルヒ

「では1ヶ月後」

第6話 自習

2日後 月曜日

タタタタタタ。

明久

「やばい、早くしないと遅刻だ！」

僕は全速力で校門に飛び込んだ、その先に鉄人が……………いない？

明久

「まさかもうHRが始まって…よけいやばいじゃん！！」

ダダダダダダダ！

ガラッ！

明久

「すいません遅れました！」

鉄人？

「遅いぞ吉井、バケツを持って廊下に立ってる」

明久

「古典的だ…って秀吉か。おはよう秀吉、鉄人は？」

秀吉

「おはようじゃ明久、鉄人なら緊急職員会議で会議室のはずじゃぞ」

雄二

「しかも午前の授業が全部自習になるおまけ付きのな」

自習か…自習となると……。

翔子

「…雄二、一緒に勉強」

美春

「お姉様と美春と一緒に勉強いたしましょう」

雄二、美波

「うわっ!？」

…やっぱり？

明久

「まあいいんじゃない、みんなで勉強しようよ」

美波には悪いけど、霧島さんの犠牲になってもらう。

雄二

「明久てめえ？」

美波

「ア〜キ〜？」

翔子

「雄二、吉井はいい人」

美春

「今だけはブタ野郎を返上してやりますわ」

とりあえずこれで昼休みまでは勉強しなくて済むな。

さて、昼ご飯はどうやって断ろう…。

そんな考えを巡らせながら時間は午後へと移っていった。

第7話 昼休み

瑞希

「…あ、そろそろお昼ですね」

ウツ。

瑞希

「翔子ちゃんも一緒に食べますか?」

雄二

「さらばだ」

ガッ。

翔子

「…どこ行くの雄二?」

雄二

「…えつとギャアアアア! !質問したなら答えを待てえええ! !」

素早く雄二を処刑した霧島さん、僕の場合は美波だけど…。

美春

「お姉様、私と一緒にお昼ごはんを…」

美波

「いやよ、美春」

美春

「まだ言い終わって…」

美波

「ウチはアキ達と一緒に食べるから」

美春

「なら私も一緒に」

美波

「…仕方ないわね」

あ、犠牲者が増えた。

だけど今なら！

ダッ！

ガッ？

明久

「み、美波？」

美波

「アキ、どこ行くの？」

考える暇はない、とにかくやられる前に答える。

明久

「久保君のところ」

.....。

…みんなから表情と言葉が消えた、何か選択を間違えたみたいだ。
誰も動けずにいたら…。

ガラッ。

鉄人

「全員すまないが昼と午後の授業を使って全校集会だ。今すぐ体育館に集合」

雄二

「翔子、そうみたいだからAクラスに戻れ」

美波

「美春も戻りなさい」

翔子

「わかった」

美春

「仕方ありませんわ」

しづしづと戻る二人。

鉄人

「よし全員そろったな……………逃げるなよ」

そこまで言われなくても逃げるわけがない、何故なら…

…授業が潰れたから。

でも集会自体が珍しいので少なくとも耳は傾けるからあまり心配ないけども、一体何があったんだらう？

隠蔽主義のババアが集会、それも全校とは…。

そんな疑問を残して僕らは体育館についた。

第8話 全校集会

ザワザワザワザワ。

学園長

「……………うるさいよ黙りなクソガキども」

これだけの人数だ、そう簡単に全員黙るのは難しい。

……………特に僕らFクラスは。

鉄人

「黙れ」

……………。

どうやら鉄人の威力は1年生にも知れ渡っているようだ。

学園長

「早速だが本題に入るよ、あんた達もこの学校の生徒なら試験召喚システムがあることぐらい知ってるさね」

一体あのババアは何を話す気なんだ？

学園長

「一昨日そのシステムを使って試召戦争を仕掛けて宣戦布告した奴らが来たさね」

ザワ……………ザワ……………ザワ……………。

明久

「…雄二、コレってまさか…」

雄二

「ああ、そのまさかだ」

明久

「ついに他校生が秀吉を狙って来たんだね」

雄二、秀吉

「それは絶対に違うと思う（のじゃ）が!？」

学園長

「うるさいよガキども!」

鉄人

「静かにしろ」

……………。

学園長

「ったくこれだからクソガキ共は…面倒だから詳しい事は後でプリントで渡すさね。はい終わり、さっさと教室に戻るさね」

な、なんて自分勝手なババアだ、でもコレで早く家に帰れ……

鉄人

「お前たちには今のプリントを渡す前に補習プリントをやるから帰るのはその後だぞ」

……当分家に帰れそうにない。

特別ルール

SOS団VS文月学園

試験召喚戦争ルール

- ・この戦争は他校の生徒との交流試合である。
- ・この戦争は大将撃沈型でなく全滅型である。
- ・この戦争はSOS団が全20試合を全勝した場合のみ勝ちとし1敗でもした場合文月学園の勝ちとする。

・文月学園の20チームは

1～3学年の各6クラス

全18クラス

教師チーム

生徒+教師混合チーム

の20チームである。

- ・対戦順はSOS団が決める。

・試合中は回復試験を受ける事は出来ない。回復試験を受ける場合は試合と試合の間に受ける事。

- ・試合は毎週1試合、金曜日の放課後に行う。

・試合開始までは全員所属クラスの中、SOS団は体育館の中にあること。

・試合に参戦していない生徒は試合を観戦してもよい。ただし助言や妨害、観戦者同時の会話等で試合に影響する行為をした場合補習室へ送られる。

・その他の細かいルールは通常のルールに従う。

・なお負けた側の人達は多少の人権が侵害されることがある為心して望むように。

第9話 感染

1ヶ月後 金曜日

ハルヒ

「やっとこの日がきたわね」

今日は文月学園との初戦だ。

現在森さんが運転している車で向かっている最中だ、何故？とツツコミをいれたいが今はそんな暇はない、何故なら……

《古泉

『……あなた、まさか例の世界を忘れていませんか？』

キヨン

『……ああ、忘れていないぞ』

古泉

『……その長い間は無かったことにします』《

……という訳だ。

流石に数百人もの人達に迷惑をかける訳にはいかないので必死に打開策を考えているが全く思いつかない。

車というのは速いもんだ、もう校舎が見えて来た。

森

「到着しました」

ハルヒ

「さあみんな、張り切っていくわよ!」

4人

「……………」

ハルヒ

「みんな『行くぞー!』とか『オー!』とかなんか言いなさいよ!」

4人

「……………オー（棒読み）」

ハルヒ

「キョンは後で罰ゲームね。じゃあ入るとしましょう」

なんで俺だけ…………。

まあここまで来たら好奇心のみで出来たハルヒ菌にやられた俺の頭は考えをこつまとめた。

取りあえず今日の試合に勝てば後一週間考える時間が出る。

楽しそうだしハルヒが変に暴走しなければ作戦しだいで多分勝てるかもしれないから頑張ってみるか。

第10話 緊張down up

体育館にて。

高橋女史

「では全員揃いましたね」

一人を除いて全員が頷く。

理由は目を潰されて悶えているから。

それを見た人達の反応の見た限り、どうやら向こうの2年は理不尽に耐性があるらしい。

ちなみに全員というのはSOS団5人と各クラスの代表だ。

2、3年の代表はクラスで一番成績が高い人、1年はクラス投票で選ばれた人らしい。

高橋女史

「SOS団の皆さん、対戦チームを選んで下さい」

ハルヒ

「では……モゴッ」

キヨン

「すみませんまだ決めていないので5分程時間を下さい」

高橋女史

「5分ですね、わかりました」

先生が時計を見始める。

ハルヒ

「ちよつとキヨン、何邪魔してるのよ！」

キヨン

「お前なら『全員一度にかかってきなさい、まとめて蹴散らしてあげるわ！』とか言いそうだからな」

ハルヒ

「何よ、悪い？」

言う気だったのか。

キヨン

「悪いな」

ハルヒ

「……ならアンタの意見を聞くつもりじゃないの」

キヨン

「俺としては召喚獣の扱いに早く慣れたいと思っている、点数が低くても召喚獣の動きしだいで5、6倍の相手と同等に戦えるらしいからな。だから最初の内は1年のみを相手にして慣れたいんだが」

ハルヒ

「……キヨンにしては随分とまともな事を言うわね」

キヨン

「俺も勝ちたいからな」

高橋女史

「時間です。それでは改めて対戦チームを」

ハルヒに届いていればいいけど……。

ハルヒ

「……まずは……」

…… 1 - Aから相手して貰うわ」

なんとか届いたようだ。

高橋女史

「では所定の位置について下さい、5分後に鳴らすチャイムで開始です」

第11話 オリ名公開

キーンコーンカーンコーン。

始まったか。

ハルヒ

「行くわよみんな」

キヨン

「ああ」

5人固まって校舎の1階に入る。

俺達の作戦はこうだ。

なるべく離ればなれにならずに行動して出て来た相手は逃がさず倒す。

味方の残り点数もわかり援護も出来る少人数ならではの作戦だ。

俺の点数

朝比奈さんの操作

ハルヒの暴走

少なくともこの3人は絶対1人になってはいけない。

なら援護してもらおう為に長門と仕方なく古泉も同行してもらおうということだ。

ハルヒ

「来たわよ」

あれは確かクラス代表の工藤瞋恚だ。

(たぶん) 英語の遠藤先生と総合の高橋先生を連れている。

ハルヒ

「1人で十分だという訳？」

瞋恚

「いえ、確認したい事があるので他の人に頼めないだけです。遠藤先生」

遠藤先生

「わかりました」

遠藤先生の周りにフィールドが広がる。

6人

「試獣召喚」

全員の前に80cm程のデフォルトされた召喚獣が現れる。

英語

工藤瞋恚 186点

VS

涼宮春日 591点

古泉一樹 208点

長門有紀 741点

朝比奈未来 132点

鈴木僵尸 70点

ハルヒと長門の点数が大きく飛び抜けている。

工藤暎志も半歩程後ろに下がる。

……少し間が出来たから装備の確認をしておくか。

さて、装備はつと……

工藤暎志

武器 鎌二本

防具 鎖かたびら

ハルヒ

武器 150cm程のハンマー

防具 金の鎧

古泉

武器 赤い砲丸

防具 赤スーツ

長門

武器 星のステッキ

防具 魔法のローブ

朝比奈さん

武器 ピコピコハンマー

防具 メイド服

俺

武器 ハリセン

防具 布の服

……全員の特徴がよく出てるな。

第12話 プランB

瞋恚

「…………っ！」

工藤がいきなり特攻を仕掛けてきた!?

いち早く反応した3人、ハルヒと古泉が攻撃を仕掛ける（長門は2人の後ろで待機）が……。

ハルヒの大振りはかわされ古泉の投げた球は鎌使って軌道を変えた。

あいつ本当に初心者なのか？

そのまま2人を後にして俺と朝比奈さんに向かって召喚獣を動かしてきた。

その途中で長門がステッキで連撃をする。しかし、打撃用の武器ではないからか点数のわりに威力が随分低い。

工藤は落ち着いた様子で長門に攻撃するも屈んでかわされ帽子に当たり帽子がハルヒの方に飛ぶ。

長門の召喚獣は立ち上がって敵に攻撃……

…………… せずに帽子を取りに行った。

英語

工藤瞋恚 12点

かなり減ったがそれでも俺と朝比奈さんに向かって攻撃を仕掛けてきた。

2人共自分の武器を使ってうまくガードして工藤は高橋先生と共に走り抜けた。

工藤と高橋先生の方に目を向けると階段から1-Aと思われる3人で現れ

3人

「試獣召喚！」

英語

音無庄輝 348点

無笠陽平 287点

無藤和弥 412点

何とも高い点数を繰り出してきた。

奥で高橋先生がフィールドをつくり

瞋恚

「試獣召喚」

総合

工藤無愛 2459点

何故か召喚獣を出して

瞋恚

「全員に言う、作戦はプランBだ！健闘を祈っている！」

3人+a

「了解！」

工藤はそう伝えると高橋先生に礼をして階段を駆け上って行った。

俺は後ろを向いて3人が来た事と新たな敵がこない事を確認して目の前の3人に向かって行った。

第13話 ピンチ

古典

羅山波部間 0点

VS

涼宮春日 579点

波部間

「くそっ」

キヨン

「……長門、あと何人だ？」

長門

「……9人」

戦争が始まって30分かかく……34分51秒……たった。

それぞれが自分の得意な教科で待ち構えているので俺がまだ残っているのは長門達のおかげだ。

キヨン

「まだ戦っていない教科は？」

長門

「……数学と総合」

キヨン

「ハルヒ、どっちを先にやるんだ？」

ハルヒ

「総合は腕輪がつけられないみたいだから総合にするわ」

最後は派手に決めたいのか……やっぱりハルヒは「何ジロジロ見て
るのよ？」

キヨン

「……別に。長門、数学の先生に会わないように総合の先生のこと
るに」

長門

「……了解した」……

……キヨン

「……8人か」

単教科が4、5人だったからか多く感じる。アレ以降工藤瞋恚は見
ていない、数学が得意科目なんだろう。

ハルヒ

「……じゃあいくわよ」

13人

「試獸召喚！」

総合

朝霧静香	2154点
喜浦保仁	2026点
瀬川瑛子	2024点
田畑靖枝	2521点
名倉留美	1637点
浜北慶	1529点
松江里佳	2655点
稿炉留	4193点
VS	
涼宮春日	4080点
古泉一樹	1283点
朝比奈未来	1064点
長門有紀	7689点
鈴木僵尸	514点

.....おかしい、少なくとも総合は4桁あったはずだぞ。

古泉

「.....どつちら単教科のダメージがそのまま影響してるみじですわね。
コレだと逆もまた.....」

ハルヒ

「来たわ!!!」

8人が編隊を組んで（稿 俺、古泉、朝比奈さん）（喜浦、瀬川、名倉、浜北 ハルヒ）（朝霧、田畑、松江 長門）仕掛けてきた。

……初っぱなから凄いピンチだ。

第14話 一人足りない

.....

総合

朝霧静香 241点
田畑靖枝 584点
松江里佳 65点
VS
長門有紀 3215点

喜浦保仁 1268点
瀬川瑛子 946点
名倉留美 72点
浜北慶 90点
VS

涼宮春日 1493点

稿炉留 3826点

VS
古泉一樹 223点
朝比奈未来 16点
鈴木僵尸 0点

ハルヒ

「ちよつとキヨン！何勝手にやられてるのよ！」

キヨン

「仕方ないだろ、ダメージの量が桁違いに多かったんだから」

RPG序盤並みの防具と数字だからかすり傷も致命傷になりかねない。

布の服より弱い装飾が知りたい。

それにしても長門が随分と苦戦している。

単教科ではメラ ーマやマ ヤドを使っていたから威力の低い打撃で戦っているのを見るとたとえ勝っていてもそう見える。

総合

朝霧静香 0点

田畑靖枝 81点

松江里佳 0点

VS

長門有紀 2936点

喜浦保仁 209点

瀬川瑛子 430点

名倉留美 0点

浜北慶 8点

VS

涼宮春日 925点

稿炉留 3784点

VS

古泉一樹 0点

朝比奈未来 0点

ほぼ同時に5人……………6人が倒れて長門は稿と対峙した。

この試合はギリギリだが勝てそうだ……。

……まだ一人いたな、勝てるのか？この試合。

第15話 これは……

総合

喜浦保仁 0点

瀬川瑛子 0点

浜北慶 0点

VS

涼宮春日 74点

稿炉留 0点

VS

長門有紀 245点

炉留

「あゝあ、あともう少しだったのに」

とりあえず総合科目は勝てた、けどこの点数だとかなり危ういだろ
う。

ハルヒ

「さあとつとと大将とるのよ！有紀、案内して、全力で！」

なっ、全力ってハルヒ、お前ついていけないだろ！？てかもう行っ
てるし！

キヨン

「古泉、朝比奈さんを」

返事を待たずにハルヒを追いかける。

工藤の点数が気になるが応援すれば少しくらいは勝てる確率が高まるかもしれない。

そんな事を考えている内にハルヒを見失った。

……さっき長門がよけたここか……いた！

点数は……

数学

工藤 暎志 0点

VS

涼宮 春日 9点

長門 有紀 27点

キヨン

「ハルヒ、勝てたんだな」

ハルヒ

「……キヨン。違うわ」

何だろうか、いつも俺に向ける呆れた視線より深い同情の視線を工藤に向けていた。

キヨン

「勝てたんじゃ無かったら何なんだ？俺には勝ったようにしか見えないんだが？」

ハルヒ

「……キヨン、相手の召喚獣をよく見なさい」

よく見る？意味が分からないがとりあえず見るか……

数学

《1 - 87クラス》

工藤暎志

0点

……… 1 - Aのクラス代表が一人だけクラス替えをしたらしい。

そして1年生は英文字では足りないほどたくさん生徒がいるようだ。

キヨン

「………つまり、解答欄を間違えて記入したのに気付かずに0点になつて」

ハルヒ

「0点の召喚獣を出して自滅したのよ」

そりゃハルヒも同情するわ。

第16話 ……略(笑)

それから省略して

ハルヒ

「トドメッ！」

腕輪が光り、ハンマーに付いているロケットブースターが噴射する。
そして召喚獣が砕け散る。

古文

高城一哉 0点

VS

涼宮春日 5 1 2点

古泉一樹 1 1 4点

長門有紀 6 7 2点

朝比奈未来 2 3 6点

鈴木僵尸 1 1 8点

おおー勝った勝った、これで後4試合か……………

そろそろ真面目に回避策を考えないとな。

一哉

「…まいったな。ここまで強くなるとは、ちょっと油断してたな」

それは俺も同感だ。何せ俺を含め全員生きて勝てるようになったんだからな。

なんだろう、他の試合がどうたらとか聞こえた気がしたが気のせい……ん、なんだ紙か……作者の実力を思い知ったか……
……何のことだ？

高橋

「終戦直後ですみませんが、来週の対戦相手は決まっていますか？」

総合で終わったからか高橋先生が聞いてきた。

ハルヒ

「……じゃあ、2 - Aをお願いします」

とりあえず次の2 - Aの試合に備えて点数をためるとしよう。

第17話 気づけ

一週間後

17戦目の2-A戦が始まった。

ハルヒ

「みんな、ここから更に強くなるみたいだから気をつけていくわよ」

そう、長門によるとこの2クラスは試合数が多く、科目のスペシャリストが他クラスに比べ沢山いるらしいから油断が更に出来ないよ。うだ。まあ俺は油断できる程の気持ちに余裕が無いから焦るだけだな。

俺達が階段前に来た時、

知的眼鏡

「来ましたね」

眼鏡をかけた男子が言う。

近くにいる先生は……田中先生、教科は世界史か。というかもしかして全員集合してないか？

ハルヒ

「ええ来たわ、時間が勿体ないから早く始めましょ」

知的眼鏡

「そうですね、始めましょか」

55人

「試獣召喚！」

55人の召喚獣が現れ……

なかった

多過ぎて溢れてしまった。

第18話 先制攻撃

世界史

相原葵	398点
江西万智	469点
太田祐樹	454点
笠松輝	325点
木田大地	345点
久保利光	452点
佐藤美穂	364点
飯島卓也	309点
紺野洋平	313点
森兵恵	321点
藍原和水	427点
蒲生寿輝	419点
曾山欄	446点
田畑栄旬	468点
東陶仄	501点
VS	
涼宮春日	610点
古泉一樹	289点
長門有紀	803点
朝比奈未来	211点
鈴木僵尸	145点

召喚できたのは20人、つまり35人がフィールドの外にいる訳か、
というか敵味方入り乱れた満員電車のような状態だから……

ハルヒ
「いつけえー！ー！！」

佐藤美穂 0点

飯島卓也 0点

紺野洋平 0点

森兵恵 0点

VS

涼宮ハルヒ 610点

動けない相手に容赦ない一撃を叩き込んだ。

「試獣召喚！」

早見英司 300点

残った一人が焦って召喚した。せっかく開いたスペースを少し埋めてしまった結果。

藍原和水 2点

蒲生寿輝 0点

曾山欄 34点

田畑栄旬 71点

VS

涼宮春日 610点

少し余ったな。

藍原和水 0点

曾山欄 0点

田畑栄旬 0点

VS

長門有紀 803点

朝比奈未来 211点

鈴木僵尸 145点

8人をこんなに早く倒せた、これは新記録物だ。

久保

「あまり一度に出すと動けなくなって餌食になる、少しずつ長期戦でいこう」

やっぱり一教科に絞ってまとめて倒す方法らしい。ダメージの蓄積で倒すやり方は無かったから単教科の全力が出しづらいう上に特攻なんてされたらたまったもんじゃない。

……これは、思った以上に辛くなりそうだ。

第19話 組み手

世界史

日下部照義 316点

VS

涼宮春日 197点

桑沢友里 184点

VS

古泉一樹 45点

木下優子 263点

工藤愛子 201点

VS

長門有紀 325点

霧島翔子 430点

VS

朝比奈未来 0点

鈴木僵尸 0点

我ながらよくもった方だと思う、今のような状態のエンドレス(?)
組み手を延々と続けていたのだから。

周りを見渡すと今戦っている人達で終わりのようだ。これなら勝負
は……

世界史

日下部照義 6点

V S

涼宮春日 0点

桑沢友里 0点

木下優子 0点

工藤愛子 0点

霧島翔子 145点

V S

長門有紀 152点

ハルヒといつの間にか古泉も倒されたが問題無く勝てそうだ。
……
次の試合は予想道理でFクラスになった。

第20話 a l a l a l a l a l a l a l a l a l a l a l a l a

キンコーンカーンコーン

始まったか。

ハルヒ

「このクラスで強いのは数人だけどその強さはトップクラスだから
雑魚に慣れちゃダメよ！」

つまりそいつら以外は俺と同じ位ということか。

キヨン

「なあハル」
「……………」

……気のせいだ

……気のせいのはずなのに

……怖い。

朝比奈さんが声を立てずに怯えている。その姿はとても愛らしいと思うが思うだけにしておく、もしすっかり喋ったりしたら謎の軍団がやっつきそうだ。

キヨン

「……ハルヒ、どっする？」(小声)

ハルヒ

「二手に分かれましょ」(小声)

キヨン

「じゃんけんでいいな」(小声)

ハルヒ

「うん。……じゃんけん」(小声)

グー…ハルヒ、古泉、朝比奈さん

……生贖？

F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	島田美波	
F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F		
F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F		
寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸	寸		
											μ													
-	-	-	-	-	-	-	7	3	7	5	6	6	8	5	5	7	5	4	7	6	6	7	5	1
							9	1	8	7	6	5	7	0	3	4	9	9	5	3	8	1	2	8
							点	点	点	点	点	点	点	点	点	点	点	点	点	点	点	点	点	点

数学

第21話 特攻

V S

長門有紀 794点

鈴木僵尸 162点

キヨン

「って危なっ！」

最後の7人が点数が表示する前に特攻し終わってた……ギリギリかわしたけど。

それにしてもフィールドが広い、既に四方を囲まれた

キヨン

「……島田さん」

フードを被ってない女子に声をかける。

美波

「……何？」

キヨン

「こんなのといて悲しくない？」

美波

「何当たり前のこと聞いているの？」

キヨン

「……そうだな」

島田美波 0点

V S

長門有紀 794点

F F F 団 24人 -

V S

鈴木僵尸 162点

ちなみに俺は一人の動きを一瞬止めて壁にただけで自滅特攻してくれだ。

第22話 一瞬

総合科目にいた二人をあっさりと長門が倒して進んでいるとハルヒ達が誰かと戦っていた。

保健体育

土屋康太 651点

VS

涼宮春日 0点

古泉一樹 0点

朝比奈未来 0点

…え？

キョン

「……ハルヒ……まさかあいつの点数……」

ハルヒ

「うん……多分、有紀より上だったわ」

長門以上の点を探れる人間がいたのか……。

でもハルヒ達がだいぶ削ってくれたみたい（そうでないと困る）だからこれなら。

二人

「「試黙召喚」」

保健体育

土屋康太 6 5 1 点

V S

長門有紀 7 1 3 点

鈴木僵尸 1 4 2 点

勝負は文字通り一瞬だった。

相手が腕輪を光らせて高速移動した移動線上に氷の矢を長門が出して串刺しになった。

速すぎて曲がれないほどのスピードを出した相手の自滅に近い勝負だった。

第23話

にしてあげる

もう一度変な軍団が押し寄せて来たが同じ方法で倒した。

20分くらい前の出来事くらいわかるだろうに何で……

…死人に口なしか。

長門が俺の制服の袖を軽く引いてきた。

キヨン

「どっした長門？」

長門

「……あれ」

キヨン

「……ああ、あれか」

あれとは世界史の田中先生とクラス代表、あと知らない奴一人。生徒の二人がどちらがあれ呼ばわりされたか言い争っている、どっちもなのに。

キヨン

「なあ、そろそろ始めたいんだが」

雄二

「観察処分者のお前より頭の悪……すまん、始めようか」

観察処分者？

どこかで聞いたような気が……。

キヨン

「……雑用係か」

二人

「「何で知ってるの（んだ）！？」」

キヨン

「学園長って人」

明久

「あんのクソババア！！」

雄二

「落ち着け明久」

明久

「離せ雄二、僕はいまからクソババアを殴るといふ大事な使命を果たさないといけないんだ！！」

雄二

「いいから落ち着いて俺の話の話を聞け」

明久

「……いいだろう、但しどうでもいい話だったら容赦なく売り飛ば

すからな！」

雄二

「ああいいぞ。まず先に、ババアを殴ったら手が汚れるぞ」

明久

「う……」

雄二

「だったらババアを殴るより聞かれたあいづらが口外しないように召喚獣で殴り倒せば済むんじゃないか？」

明久

「そっか、流石雄二だね」

キヨン

「……とりあえず話をついたようだな」

明久

「ギッタギタにしてあげる」

キヨン

「……大丈夫かお前？」

明久

「ギッタギタにしてやんよ」

キヨン

「……えーと、先生」

田中先生

「あ、はい」

フィールドが出る。

3人「試獣召喚」

明「ギッタギタにして試獣召喚」

第24話 同時

世界史

坂本雄二 252点

吉井明久 198点

VS

長門有紀 814点

鈴木僵尸 119点

二人

「ッハッ！」

長門の点数は凄いけど、リアクションするほどか？

雄二

「明久、向こうの女子は頼む。俺は雑魚を片付けたらすぐ援護する」

雑魚言っな。

明久

「無理だよ。てか点数の高い雄二がいきなよ」

雄二

「明久、お前は点数が数倍以上の相手でも互角以上に戦える操作能力がある限りお前は強い」

明久

「……わかったよ、やってやるっじゃないか」

雄二

「よし、いくぞ明久」

明久

「おうっ」

俺の相手は坂本って奴か……けど、メリケンサックってリーチ短すぎやしないか？

俺と坂本の勝負は一方的だった。

ハリセンは他の武器にはない異常なしなりからの攻撃で突きや縦の攻撃をかわしながらダメージを与える。替わりに横の攻撃は武器で防げないが、パンチの横は予備動作があるから避けることが出来る。

あと一、二撃で倒せると思った時、後ろで鈍い音がした。

長門の攻撃ではありえない音だった俺は反射的に後ろを向いた。

吉井明久 7点

VS

長門有紀 0点

……え？

負けたのか？

長門が？

雄二

「隙ありっ」

キヨン

「……あっ」

気を逸らした俺は3、4回続けて攻撃をモロにくらぶ。

坂本雄二 13点

V S

鈴木僵尸 16点

まだ大したダメージを受けてなかったのと点数がかなり減ったのもあつて戦死は免れた。

今度はちゃんと留めをさして後ろを向くともう相手が木刀を振ろうとしていた。

後ろを向いた勢いで流れる動作の中ハリセンで相手を攻撃して当たった瞬間

吉井明久 0点

V S

鈴木僵尸 0点

同時に戦死した。

第25話 無効

ハルヒと学園長が話し合いをしている間、俺達は文月学園の生徒達と雑談をしていた。

「君達凄いやね」

「ああ、なんて馬鹿げた事を挑んだんだ？」

「そういう意味の凄いで言ったんじゃないけど」

「でもやっぱり凄いや」

「特に一人がな」

「あの子はもはやチートだな」

「しかも見た目だって……」

「くそお、なんて羨ましいんだ！」

「そうだ！他の子だってL.Vが高いし……何でお前みたいなさえない奴が！？」

「そうだそうだ！俺達だってけっこうさえない方なのに」

「さえないすぎて名前が出て来ない位だよコンチクショー」

これは雑談と言えるのだろうか？

ハルヒ

「お待たせ……あれ？古泉君は？」

キヨン

「……あれ？どこだ？」

長門

「……あそこ」

ああいたいた、アドレス交換していたのか。

古泉

「お待たせしましたか？」

ハルヒ

「ううん、さっき話終わったところだから」

キヨン「それで、どうなったんだ？」

周りも静かになっていく。

ハルヒ

「……結果は……」

てよかった。

「テメエ表に出る！」

「いいだろう相手になってやるよ」

よかった……よな？

ともかく俺達は帰路について5人分かれて家に向かい30秒くらいたつたころ、携帯が鳴って取り出す、メールか……

「緊急事態：大変なことが起こりました。出来る限り急いで公園に来て下さい。」

古泉」

大変なこと？ハルヒがまたやらかしたのか。

でも何で俺に伝える必要があるんだ？とりあえず俺は公園に向かった。

第26話 ナニ？

キヨン

「おい古泉、大変な事って一体何だよ？」

公園にはハルヒを除くSOS団4人が揃っていた。

古泉

「大変すぎて涼宮さん本人にも変える事が出来ないのですが、一言で言うと世界が変わる……いや、混ぜって無かった事になります」

キヨン

「待て、色々聞きたいが原因は何だ？」

古泉

「……あなたですよ」

はあ！？

古泉

「あなたが先程の戦いで相討ちをしたのが原因です」

キヨン

「あいつは勝てなかっただけで世界を巻き添えにするのか」

古泉

「いえ、彼女は負けてもよかったですよ」

キヨン

「……………おいまさか中途半端に終わったから……………」

古泉

「そうです」

キヨン

「……………原因はわかった、でハルヒが止められない理由は？」

古泉

「相討ちをしたのがあなただからです」

また俺か。

古泉

「あなたなら勝ってくれると信じていた結果が引き分けですからね」
勝手に信頼して勝手に暴走してしかも止められないって……………つくづく
迷惑かけるな本当。

キヨン

「……………で、混ぜって無かった事になるってというのは？」

古泉

「そうですね……………現在過去未来、あとその全ての時間帯と平行する
全ての異世界が一つになるんです」

ハルヒはついに次元単位のブラックホールになったか。

キヨン

「知らない奴がたくさん増えるってことだろ、それだったら別に呼

ばなくなつてよかつたんじゃないか？」

古泉

「それだけですめばですが」

どういうことだ？

古泉

「《一》という文字を書く時間だけでも無限に切り分ける事ができません。それをずっと前からずっと後まで、そして同じ時間でも限り無くある異世界を一つにしようにも限界があります」

まあ確かにそうだな。後半は正直どうやって限界を知ったのか気になるが取りあえずスルーしておく。

古泉

「だから元に戻ります。但し、ランダムに」

……えーとつまり……その……なんだ？

古泉

「自分が振り分けられたら自分を知っている人と会う事は天文学的數字より低いです」

二度と会えないという事か。

古泉

「多分記憶の方も都合よく改ざんされてたとえ会えたとしても赤の他人になるでしょう」

………本当に聞かない方がよかったんじゃないか？

キヨン

「なあ古泉」

古泉

「なんでしょうか」

キヨン

「知らぬが仏って言葉の意味知ってるか？」

古泉

「………さて、何のことでしょう？」

おい、エラく溜めrun

俺は

何が

何か

誰で

何の

何で

何ら

何て

ナニ？

第26話 ナニ？（後書き）

はじめまして、メールです。

この度は『バカとハルヒと宣戦布告』を最後まで読んで頂き誠にありがとうございます。

正直、読者の中にはこんな短文に1年掛けてんだよ！単位違うだろ！な方がいると思いますが、全くその通りです。こんな駄文は最低毎日更新でないと許さないレベルです。

ですので、読んでくれたあなた方には本当に感謝します。

次にこの作品についてです。

この作品のコンセプトは『全ての始まり』です。故にこの作品単品ではバッドエンドですが、主に二次創作などの物語全てに対してはトゥルーエンドになりました。

涼宮ハルヒの憂鬱を取り入れたのはハルヒの圧倒的な力である情報量、時空間創造や削除（切断）の暴走。

バカとテストと召喚獣を取り入れたのはハルヒの力をどうやって安全に（目指すのはバッドエンドでありデッドエンドではない）暴走させるか考えた結果、戦争という明確に勝敗がつくものでありながら生命の危険が一切及ばないものという有力な作品だったので採用され見事クロスオーバーとなりました。

また、今回は原作同様にキョン視点（キョンの出ない話のみ明久視点）でしたがちゃんと谷川流さんのキョンになっていれば幸いです。

勿論井上堅二さんの明久、そしてお二方の作風も再現出来ていればとても嬉しいです。

ここで書くべきではないと思いますが次回作については来月に2本同時進行で始めたいと思います。進行速度は残念ながら今まで通りに1話を目標に書くつもりです。(しかもどちらか一方のみのバカさ加減がひどいです)

こんな執筆者としてダメダメですが、私メールの次回作にご期待下さい。

本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9134o/>

バカとハルヒと宣戦布告

2011年12月4日01時50分発行